

「経済表」二百年記念刊行物二種

坂 田 太 郎

(A) François Quesnay, médecin et physiocrate, catalogue des documents réunis pour l'Exposition organisée à l'occasion du Bi-Centenaire de la publication du Tableau Economique, avec une introduction de Louis Baudin, publié par les Archives Nationales, 1958.

(B) Bi-Centenaire du Tableau Economique de François Quesnay (1758~1958), organisé par l'Association Française de Science Economique, 1958.

この二種の刊行物の一つ(A)は、一九五八年フランスワケネーの「経済表」二百年を記念して、パリの国立文書保管所が展示したケネー関係の資料の目録であり、他(B)は、同年六月初旬ケネーの生地メレ村とパリとでフランス経済学協会主催の祭典が行なわれ、各国から参集した研究家の講演があった時の講演を集録したものである。たいへん紹介がおそくなって気おくれがするが、あまり紹介されていないので、あえ

て筆を採った次第。ちなみに(B)は市販されているらしいが(A)は非売品である。したがって希望の向きは、国立文書保管所に直接寄贈を申し出られるといい。なお筆者はこの二書を、祭典にわが国から出席された東大の横山正彦教授から贈られた。ここで同教授にあつくお礼を申しあげる。

さて(A)は、パリの国立文書保管所(Archives Nationales)が展示したケネー関係の資料の目録であるが、展示された資料は当の文書保管所蔵のものももちろん、国立図書館、造兵廠図書館(Bibliothèque de l'Arsenal)、フランス学士院科学アカデミー、同医学アカデミー、パリ大学医学部、それにケネーの郷里セーヌ・エ・オーワーズ県の文書保管所からの出陳があり、その他生地メレ村の村長やパリ市議会議長の展示資料があるのみでなく、ケネー家の血筋をひく個人や一般個人の所蔵文書もかなり出品されている。

(1) この機関をわれわれは従来「文書保管所」の名で呼んできたが、一九五〇年各国のこの種の施設の第一回国際会議がパリで開かれてから、わが国でも関心をもたれ、「古文書館」の名が専門家の間で行なわれていくらしい。しかしこの機関は、ただ古文書の蒐集保管を目ざすものなのでなく、最近では現代の各種資料、とりわけ経済関係のその蒐集整備に力を注いでいるようである。だから「文書保管所」の名を避けるとするなら、「古文書館」よりもむ

しろ「資料館」とでもいった方がより適切だと思ふ。この機関の事業、とくに最近のそれについては左の文献を参照。Charles Braibant: *Les Archives de la richesse française, publiées par la Direction des Archives de France*, 1958.

ケネーの伝記としては、今世紀に入ってから、ギェスタール・シェルのものが典拠とされつつある (Gustave Schelle: *Le docteur Quesnay, chirurgien, médecin de Madame de Pompadour et de Louis XV, physiocrate*, Paris, 1907)。今日やむじの書にそれに続くウーラムスの大作 (Georges Weulersse: *Le mouvement physiocratique en France de 1756 à 1770, 2 tomes*, Paris, 1910. Id.: *La physiocratie à la fin du règne de Louis XV de 1770 à 1774*, Paris, 1959. ただこの書は「伝記」として書かれたものではなく) の墨を摩すほどのものは出ていない。これらの書が出る前までは、オンケンがその『ケネー著作集』に収録したいくつかの頌辞などが、有力な伝記資料とされていた。ところがこれらの頌辞の伝記的部分はおおく、ケネーの智に当たる医師エヴマン (Prudent Hévin) の作った覚書に依拠しており、その覚書が血縁のものにあり勝ちの事実の隠蔽や粉飾を含む事情がその後あきらかになったのである。シェルの『ケネー伝』は、ケネーが十五カ年もボンパドール侯夫人の側近にあって主治医として仕えたこと、外科医の名において長きに亘りパリ大学の医学部に果敢な闘争を挑んだこと、などに頌辞が触れていないのは、エヴマン覚書がそ

うした事実をひたかくしにしたからだという事情をあきらかにしている。

- (2) 上掲の頌辞のうち差ご当たつてついで問題となる *Eloge de Quesnay* par Jean-Paul Grand-Jean de Fouchy, *Oeuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay, accompagnées des éloges et d'autres travaux biographiques par différents auteurs*, publiées par Auguste Onken, 1888. *Eloge historique de M. Quesnay par le Comte D'Aillon*, loc. cit. 島津・菱山訳『ケネー全集』第一巻所収。
- (3) Schelle: op. cit., pp. 3~6.

ケネーの父が農夫であったか法曹 (avocat en parlement) であったかという点については、以前の伝記はまちまちであった。英語で書かれたマカロックの伝記などがオセ夫人の手記やケネーの弟子デホンの記述にしたがって、彼の父を peasant-proprietor としているにもかかわらず、同じ頃本国で出たテール編の『フィジオクラト』は、高等法院の弁護士だったと書いている。テールの典拠はケネーが没した一七七四年に、グラウンジャン・ド・フンが科学アカデミーで朗読した頌辞である。彼はそのことを明示している。ところがこの頌辞の記述が、医師エヴマンの覚書をもとにしていらしいのである。

- (4) オセ夫人の手記とは *Mémoires de Madame du Harnet, avec avant-propos et notices par F. Barrière*, Bibliothèque des mémoires relatifs à l'histoire de

France pendant le 18^e et le 19^e siècle, tome III. 前記の『ケネー著作集』はこの「手記」の抜粋を載せている。ケネーの記述とは彼の編集した『ケネー著作集』(Oeuvres de M. Turgot, ministre d'Etat, précédées et accompagnées de mémoires et de notes sur sa vie, son administration et ses ouvrages, par Dupont de Nemours, Paris, 1808~11, 9 vol.)の第三巻に収めた「ケネー頌」(Eloge de Vincent de Gourmay)に付した注(Notice sur les économistes)の「ケネー」など、筆者はそれの個所をこの#を檢するに注意せられた。

(5) J. R. McCulloch: Sketch of the life and writings of Francis Quesnay, Treatises and Essays on subjects connected with economic policy, with biographical sketches of Quesnay, Adam Smith and Ricardo, Edinburgh, 1853, p. 429 note (1).

(6) Eugène Daire: Notice sur la vie et les travaux de F. Quesnay, 《Physiocrates》, avec une introduction sur la doctrine des physiocrates, des commentaires et des notices historiques par E. Daire, 1. partie, Paris, 1846, p. 3.

(7) Schelle: op. cit., pp. 3~6.
 一八世紀の末になってフランス国内にフィジオクラト、殊にケネー研究の雰囲気が高まってきたとき、ケネーの伝記のうち従来不明のままに残されていた、異説の行なわれてい

た個所の探求にもつよい関心が向けられ、ケネーの生地メレ村の所在するランブイエ郡の考古学会をはじめ、ケネーに関係のある諸地の古文書学者らによって多量の資料が発見せられ、それについて検討が行なわれた。中でも同学会のロランの業績は、量・質ともに注目をひくに足るものだったらしい。こうした新資料を踏まえて正確な伝記の作成を手がけたのがオンケンである。彼が一八八八年『ケネー著作集』を編集刊行した当時は、やはり多くの伝記作者と同様諸頌辞の記述をそのまま受け容れ、『著作集』の巻頭にこれを再録したくらいであった。(1)こゝではケネーが農夫の子であることが否定されてくる。彼が右の諸資料の一部を自分の眼で再検討して、新しく伝記を世に問うたのは一八九四年以降のことである(2)。(A. Onken: Zur Biographie des Stifters der Physiokratie, François Quesnay, Vierteljahrsschrift für Staats- und Volkswirtschaft, für Literatur und Geschichte der Staatswissenschaften aller Länder, 1894~1896, Entstehen und Werden der physiokratischen Theorie, loc. cit., 1896.)²⁾

(8) F. Lorin: François Quesnay, Mémoires de la Société Archéologique de Rambouillet, tome XIV (1900). Id.: Inauguration du monument de F. Quesnay et vie de Quesnay, Versailles, 1900. ケネーのフランスの考証にも若干の誤謬はあり、それらの誤はその後にネ・フラン(René Allain)により訂正された。なおロランをはじめ同じ頃の諸研究の一部、すなわちケリーマン

ド・ラロッタ、(Maurion de Laroque [che?]、グラヴ
(E. Grave) の業績は、小樽商科大学の『メネル文庫』
に所蔵されている。 Cf. Catalogue de la Bibliothèque
du Prof. Gustave Schelle de l'Université du Com-
merce d'Oran, 1962, pp. 78~79.

(6) Oeuvres de Quesnay, p. 17 note (2).

われわれはオンケンの労作を現在『メンガー文庫』所載の別
刷で見ることができないが、この克明な研究家が従来かな
り不明の霧に閉ざされていたケネーの生涯から、正真のすがた
をつかみとろうとした努力は、高く評価されていいと考える。
その成果は完結したものとはいえないが、一九〇二年に刊行さ
れた彼の『経済学史』(Geschichte der Nationalökonomie, 1.
Teil, Leipzig, 1902) に要約されていると見ることが出来る。

ひとびとのこうした努力にもかかわらず、一八九六年八月、
メレル村にケネーの胸像が建立されたいきさつを語る文献など
は、依然として伝説的なりあつかいをあらためていない。例
えばケネーはここでは、有能な法曹の子となっている。⁽¹⁰⁾ 古いタ
イプの郷土史家などの陥りやすい陥穽に陥ったとでもいえるで
あろうか。そのような曲折はあったにせよ、オンケンの企てた
正確な伝記作成の仕事は、一九〇七年以降シエルとウレルスの
手ではば完遂されたと見ることが出来るであらう。(ただし不
明の個所あるいは詮索を要する個所が跡をとどめないという意
味ではない。) 新らしいケネー伝が書かれなくなつてから既に
久しい。そのような状況の下に、「経済表」二百年記念刊行物

『ケネーとフイジオクラシー』(Institut National d'Etudes
Démographiques (éd.): François Quesnay et la Physio-
cratie, 2 tomes, Paris, 1958) が、エヒト女史の「ケネー伝」
を、世に送ったのは注目に値する。しかし二百年記念行事は、
エヒト女史の業績に加えて、上記(B)のうちに載っているエ
アール教授の伝記的講演を寄与した。エヒト女史のものはわが
国でもかなりその資料的価値が認められているが、これもエヒ
ト女史のものと同じく、伝記の補完資料として有益である。と
くに彼はレンヌ大学の医学部教授であり、医学者だけに、その
講演は医学者および医師としてのケネーの生涯および活動に示
唆的な光を投じてゐる。

(9) Jules Allain-Le Cannu (éd.): Livre d'or, histori-
que du monument de François Quesnay, 1900, p. 16.

この書は小樽商大の『シエル文庫』にも一橋大学の『メン
ガー文庫』にもある。胸像建立の拠金者のうちにはメンガ
ーやオンケンがいる。

(11) Jaqueline Hecht: La vie de F. Quesnay, tome
I. なおこの書には今までに書かれた伝記的文献が、エヒ
ト女史の注を付しリスト化されて載つてゐる。tome I. pp.
317~336.

(12) Quesnay et Nous, allocution prononcée par Pier-
re Huard.

さてここで話を展示目録(A)に戻したい。『目録』は三部から成っている。第一部はケネーの人となりとその家族・家系に関する資料、第二部は医師としてのケネー、第三部はフィジオクラトとしての彼に関するものである。出品は総計七一点におよび、その各点について簡単なあるいはかなり詳細な説明がしてある。

われわれはすでにシエルの『ケネー伝』の付録で、一六九四年のケネーの洗礼文書(Acte de Baptême)や一七四四年の学位記(Diplôme de docteur)の内容々々には知っていたが、第一部には洗礼文書はもちろんのこと、一七一七年ジャンヌ・カトリヌ・ドーファンと結婚する直前の夫婦財産契約書(Contrat de Mariage)だとか一七五二年の授爵文書(Lettres de Noblesse)や一七七四年の死亡埋葬書(Acte de Sepulture)に至るまで、ひと通りケネーの生涯やその係累に関する重要な資料が、一九世紀末に発見されたものを中心として記載され、それに解説が施されている。前節でわれわれが触れた髣エツソンの覚書(Notes sur la vie de Quesnay, par Hévin, son gendre)も出品されており、それには「この覚書における頌詞は、しばしば不正確である。とくにケネーの家系にかんしては粉飾が行なわれている」という説明がついている。

この第一部でとくにわれわれの注意を惹くのは、ケネーの死の直後一七七四年二月二九日付の財産産立目録(Inventaire et liquidation après décès de Me François Quesnay)である。この目録はヴェルサイユの公証人ティボーの作成したも

のとなつてはいるが、その中にケネーの蔵書目録がある。この点についての説明文の内容は簡単であつて、「先ず第一に、ペール(Pierre Bayle)の『辞書』(Dictionnaire historique et critique)および彼の『著作集』(Oeuvres diverses) 一一〇冊……二折本の『百科全書』七卷五〇冊……エルヴェシウスの『精神論』三冊……」とだけしかその内容を伝えていない。これははなはだ残念である。なぜならペールの著作一〇冊ということだけでも、われわれの興味をかきたてるに充分だからである。『辞書』と『著作集』とが一一〇冊といふのは、いさうかういふことなのか。『著作集』はペールの死後、『辞書』を除く各種の著作と書簡とをまとめて公刊されたものである。あるいはここにいう Oeuvres diverses という言葉は、普通名詞として使われているのであろうか。だとすればペールの著作は、デルヴォルヴによると三十数種に上る筈であるから、多くの異版や復本を含めてのことと考えて、冊数の多いことに大して不思議はないかも知れない。

しかしそれにしてもこの一一〇という冊数は、もし事実だとすれば、研究家にとって問題である。というのは今まで筆者の眼に触れたケネーならびにフィジオクラシーの研究書もかなりの数になるが、彼とペールとの思想的関連に触れた文献は、殆んど思い当たらないくらいだからである。たしかに著書を所有していたからといって、そこから直ちに影響うんぬんの問題は出て来ない。しかしこの数字は何といつても、ケネーがペールに対して、行きずりの関心以上のものをもっていたと一応考え

られるしるしとなりはしないであろうか。

思想家の蔵書目録がその思想家の思想の形成・展開・推移をつかむに当たっての一つの材料となりうることは多言を要しない。殊に書き入れがあったりする場合はおさらである。現にこうした配慮から、若干の思想家の蔵書目録が刊行され、それなりの役割を果たしていることをわれわれは知っている。ことにペールや『百科全書』のこれだけの冊数を所蔵していたとするなら、目録の全貌はかなりの種類と数量の典籍におよぶものであるにちがいない——と考えるのも自然であろう。この目録は展示目録の記載によると、現在ヴェルサイユの公証人ユベール氏の所蔵正本のうちに含まれているらしい。同氏の出品であることが明記されている。それだけに切角の二百年記念行事だったのであるから、蔵書目録の内容ぐらゐ一般に(単に展示会に出向いて行った人たちがばかりでなく)公表できなかつたものか。あるいは公表に値するほどの内容ではないと考へてのことだつたかも知れない。それならば展示目録の記載をもう少し丁寧にして、その旨をあきらかにして欲しかつた。展示目録を見て筆者が残念に思つたことの一つはそのことである。⁽¹⁾

(1) もっとも筆者は数年前この展示目録を入手した後に、小樽商大の『シニェル文庫』にロランの書いた「ケネーの財産について」の覚書「Mémoire sur la fortune de François Quesnay, Bulletin des Sciences économiques et sociales du Comité des Travaux historiques et scientifiques, année 1897」といふ文献があるのを、そのカタ

ログから知つた。ひよつとするとその中に蔵書目録が何らかの形ですでに公表されているのかも知れないと考へ、一応それを確かめてから二百年記念の刊行物の紹介をするつもりであつた。だがいろいろの事情でいまだに確かめに行けずにいる。この紹介の遅延の理由の一つはそこにある。了承をおねがいしたい。

『目録』の第二部については、いまここで特に問題とすべき点はない。第三部には主として、ケネーの重農主義思想の形成・展開、そしてそれが生んだ果実を示す基礎的な資料が出陳されている。上に触れた『ケネーとフィジオクラシー』の下巻には、ケネーが『百科全書』に寄稿するために書いた筈の、そしてその後香として消息不明だつた論稿「魂の機能」(Fonctions de l'âme)のラジヌムと思はれる「心理学管見」(Aspect de la psychologie)がはじめて発表されている。この論稿については、筆者も曾つて拙訳の解説で触れたことがある。発表されたテキストの付注によると、この論稿は一七六〇年三月ヴェルサイユ宮廷内で印刷されたとなつてはいるだけであるが、われわれはこの『目録』からこの論稿が、同年に刊行された『Reveil de pièces et mémoires pour les maîtres en art et science de la chirurgie』の第一シリーズ(Série in 4°)第九卷所載のものである事情を知ることができる。この文献『Reveil』は、ケネーとその掣ヒュマンとが協力して、サン・コム外科医学校とパリ大学医学部との間の闘争にかんする文書を集録し、いちいちの事件や関係者について注を付した三つ

のシリーズから成る膨大な資料集である。⁽⁴⁾しかるにその第一のシリーズ一三巻は一七五〇年の刊行の筈であり、その点については『ケネーとフイジオラクシー』上巻中のエヒト女史の「ケネー伝」と巻末にある「ケネー著作の年次表」とが一致している。⁽⁵⁾だとするとその中に含まれている「心理学管見」の刊行が一七六〇年だというのは、いささか腑に落ちない。

(2) 解説の当該箇所を再録しておく。ケネーが『百科全書』に寄稿のために書きながら、寄稿を中止した論稿が三篇ある。これらはその後発表されたが、「この他に哲学の論稿が一篇用意されたと伝えられている (Fonctions de l'âme)。しかしそれはその頭字から推して、ケネーが寄稿を中止する以前に、すでに『全書』の第六巻に収録されねばならなかった筈のものである。それがなぜ発表されなかったかは不明である。シェルの推測によると、それは「心理学管見」というパンフレットとされたのではないかとするのである。このパンフレットそのものは、今日伝わっていない。しかしボナーの編纂したアダム・スミスの蔵書目録のうちにはこの書名があり、スミスがそれを所蔵していたことが推量されるのである。」拙訳、ケネー経済表以前諸論稿、解説、三―四頁。

(c) François Quesnay et la Physiocratie, II, p. 683.

(4) 拙稿、ケネーにおける「生理」の哲学、一橋大学研究年報、『人文科学自然科学研究』IV、五頁、参照。

(5) Hecht: op. cit., François Quesnay et la Physiocratie, I, p. 248. Tableau chronologique des oeuvres de F. Quesnay, loc. cit., p. 306.

しかしこの第三部で一番われわれの関心を惹くのは、「経済表」第三版のとりあつかい方である。『目録』は表の第一版手稿と第二版校正刷の出陳を示しているが、それには差し当たって問題はない。従来われわれは、一八八九年シュテファン・パウエルの手でパリの国立文書保管所所蔵の『ミラボー文書』(Papiers de Mirabeau)の中から、第一版の手稿とともに発見された第二版の校正刷が一八九四年、イギリス経済学協会の手で公開せられ、それが「経済表」の「定本」としてとりあつかわれてきた事情を知っている。それは巻頭にある六〇〇リールの収入を起点とする一枚の原表(a)とそれにつづく二頁の「経済表の説明」(Explication)(b)、つぎに第二版の表を修正した六〇〇リールを起点とする一枚の原表(c)、そして最後に第一版の「国民年収入の分配の変化についての注意」(Remarques sur les variations de la distribution des revenus annuels d'une nation)の標題をあらため、内容を増訂し、一項目を増加した四頁の「シェリ氏王国経済の抜粋」(Extrait des Oeconomies Royales de M. Sully)(d)から成るものである。⁽⁶⁾

(e) Tableau Oeconomique by François Quesnay, first printed in 1758 and now reproduced in facsimile for the British Economic Association, London, 1894.

しかし第二版と同じ一七五九年の末に印刷されたと伝えら

れる第三版については、今世紀になっても依然として消息不明のままであった。ところが一九〇五年にいたり、シエルが第三版を偶然の機会に手にしたといひ、これを他の版本と比較する一文を発表した。それによると四折本のこの版本は、巻頭に六〇〇リールの収入を起点とする原表(a?)があるが、第一版の表を修正した原表(c)は削除されている。「説明」(b)は二頁であつて第二版と同じらしいが、「抜粋」(d)はその「注解」(notes)とともにその分量が増加し、第二版では四頁であつたものが第三版では二二頁分を占めるほどになつてゐる。シエルはこの一文のうちに「抜粋」の部分のみを公表したが、それには二項目が殖えてゐる他、多くの項目にかなりの加筆が施されてゐる。著るしく分量の増加したのは「注解」の部分である。しかしこの部分は、一七六七年デュボンが編纂した『フィジオクラシー』所載の「箴言の注解」(Notes sur les Maximes)と全く同じではない、といふのである。だがシエルは、この第三版を「決定版」と呼んでゐるにもかかわらず、なぜかそれを公表することをしなかつた。

(7) Schelle: Quesnay et le tableau économique, Revue d'économie politique, 19^e année, 1905, pp. 502 ~ 503. Id.: Le docteur Quesnay, pp. 260 ~ 261.

(8) Schelle: Quesnay et le tableau économique, pp. 508 ~ 513. Id.: Le docteur Quesnay, pp. 271 ~ 278.

(9) 「箴言の注解」はオンケン編の『ケネー著作集』や『ケネーとフィジオクラシー』下巻に再録されてゐる。な

お第一版の「注意」が第二版、第三版の「抜粋」を経て「箴言」に發展する推移については、Les étapes de l'évolution des remarques aux «Maximes」、拙訳、ケネー経済表、所収、を参照。

それゆゑ第二版の前半の部分、すなわち巻頭の原表(a)とそれにづく「説明」(b)には殆んど変化がなく、全く同じかまたはほぼ同じものが第三版の前半を形づくつてゐるが、後半の原表(c)は削除され、「抜粋」と「注解」(d)とにかんりの変容があつたというのが、この一文からわれわれの受けた印象であつた。

しかるに『目録』を見ると、第二版のつぎに「経済表の説明」が載つており、それには、「ケネーは表の第三版にこの「説明」を添加した。ここにあるその校正刷には、疑いもなく、ケネーの手による校正の跡がある」と書いてある。だが「説明」は、第三版になつてはじめて「経済表」にあらわれたのではない。それは第二版からすでに、その一部をなしてゐるのみならずこの出品には『ミラボー文書』中の番号(M 784 71, 9)が打つてある。けれども、この番号をうった文書はあきらかに第二版所収の「説明」である。このことは、筆者が文書保管所の好意で取り寄せた第二版のマイクロ・フィルムから確認することができる。もし第三版所収の「説明」だとするならば、シエルが上掲の論文で指摘したように、第二版の校正刷にペンで書き入れてある箇所は、第三版になると本文中に組み入れられてゐるか、あるいは正誤表の中に挙げられてゐるのでなければならぬ

からである。⁽¹⁰⁾

(9) Schelle: Quesnay et le tableau économique, p. 503. Id.: Le docteur Quesnay, p. 261.

それゆえわれわれには、「ケネーが表の第三版にこの「説明」を添加した」という説明がわからない。出品文書はまぎれもなく第二版の校正刷である。第三版にも「説明」はあるにちがいない、シエルが確認しているから。しかし第三版は、シエルが一応手に入れてそれを紹介したものの、その後の消息は再び不明になっている。だとするとここで第三版とっているのは、第二版のまちがいであろうか。いやそんなことはありえない。第二版はその全容が出品されている筈であるから、特にその一部分の「説明」を別に出品する意義は認められないように思う。

このことはどうも、同じ二百年記念刊行物の『ケネーとフィジオクラシー』下巻における表第三版のとりあつかい方と、関連するのではないかと考えられる。下巻はケネーの著作集であるが、その中に「経済表の説明」も収録されている。ところがその付注を見ると、この「説明」は第三版の一部をなすとある。(「して見ると第二版にはなかつたことになるのか。そしてその前には六〇〇リヴルを起点とする表があり、その後には、二四項目から成る「抜粋」が来る。「抜粋」の「注解」は大へん分量が多くなり、『フィジオクラシー』における「箴言の注解」とほぼ等しい、と。巻頭の表はミラポールの『人間の友』の中にあるものと同一だといっているから、筆者が曾つて行な

った推測がたまたま適中したことになるが、この付注だけを読むと、長らく消息不明を伝えられていた第三版が幸いにも発見されたのか、との思いを禁じえない。なぜなら編者は、この付注で重ねて、第三版の表も「抜粋」も「注解」も(「注解」も)別に再録しない、とわざわざ断わっていたりするからである。⁽¹¹⁾

(11) 前掲拙訳、解説、二一頁。

(12) Quesnay et la Physiocratie, II, p. 675 note (1).

そこで筆者が残念に思うのは、もしこの発見が事実であるなら、それはケネーの手になる表の最終版なのであるから、たとえ他の版との重複はあっても、なぜその全容を公表しなかったのかということである。なぜ展示会には第三版そのものを展示し、また記念刊行物の著作集にはその全容を載せなかったのかということである。べつに発表の体裁などに注文をつけるつもりは毛頭ないが、切角の二百年記念刊行物だけに、そのことが残念でたまらない。仮りに何らかの事情または理由でそれが不可能だったとしても、「説明」が第三版になってはじめて収録されたということなら、前世紀の末イギリス経済学協会が刊行し、長らく表の定本とされてきた第二版校正刷の内容に、大きな変更を加えることになるであろう。それに第二版の「説明」と第三版のそれとを比較した先学シエルの業績を、われわれはどう解したらよいのであろうか。それらのことについて、『目録』も『ケネーとフィジオクラシー』もなんら触れていない。これはフランスの学界としての大きな手ぬかりと考えられるし、いささか不親切だというそしりを免かれまい。

『目録』の検討に、与えられた紙数を超過してしまつたので、もう一つの講演集(B)の方は簡単に触れさせていた。上述のユブール教授のもの他、「経済表」が現代の経済学にとつていかなる意義をもつかについてキーンのシットナー、ローンンゲンのゾーグ、ノーヰンマーのトクマンチーフ諸教授の講演は示唆的であり、それぞれ特種の問題をとりえたハリ大学のフロモン、リエージュのアルサン、それに日本を代表して祭典に列席された早大の久保田諸教授の講演も興味をかゝい。参考のために目次をうぎに掲げておく。

Table des Matières

Première Partie

- La réunion de Méré.
- Allocution de M. Maurice Page, Maire de Méré.
- Allocution de M. Léon Dupriez, Professeur à l'Université de Louvain.
- Allocution de M. Pierre Huard, Professeur à la Faculté de Médecine de Rennes.
- Allocution de M. Pierre Fromont, Membre de l'Académie

d'Agriculture.

- Allocution de M. Louis Baudin, Membre de l'Institut.
- Deuxième Partie
- L'hommage solennel en Sorbonne.
- Allocution de M. Emile Roche, Président du Conseil Economique.
- Allocution de M. Akiteru Kubota, Professeur à l'Université de Tokyo.
- Allocution de M. Erik Schneider, Professeur à l'Université de Kiel.
- Allocution de M. Henri Woog.
- Allocution de M. Wassili Leontief, Professeur à l'Université de Harvard.
- Allocution de M. Paul Harsin, Professeur à l'Université de Liège.
- Hommage de M. Joseph J. Spengler, Professeur à l'Université de Durham, U. S. A.
- Allocution de M. Louis Baudin, Membre de l'Institut.

(一橋大学教授)